

概 念 概念に於ける言語の媒介

——論理研究のための一つの試み——

飯 倉 龜 太 郎

序

此の序論は、本論の主題と、其の方法とを、概括して敘述したものである。従つて、敘述の方法が、概論的に、又は、説明的に流れる傾向となるであらう。殊に、文獻上の知識に乏しく、其の上に、思索も亦淺く狭いにも拘らず、二三、哲學史上に於いて重要な位置を占める概念に就いて、新しい規定を附け加へんと試みた。従つて、此の試みに關しては、單に、一般的敘述を目的とする序論のみに於いては、正確に、理解し難い個所も生ずる結果となるであらう。其れらの點に就いては、不十分なものではあるけれども、本論の、それぞれの個所を、参照して頂きたく思ふ。

研究の中心點は、恩師・田邊元先生の、媒介の思想に在る。單に、哲學史上に於いて、例へばカントの有名な文章、及び、規定の如く、論理と歴史との、無媒介な區分、或ひは、歴史に立ちまざるものとしての論理、と云ふ考へが、行はれてゐるのみならず、われわれの思考の底深く、右の如き傾向が潜んでゐるとも、考へられるであらう。論理と歴史、或ひは、論理と事實、斯かるものの動的統一こそ、媒介の思想の眼目と云へぬであらうか。斯くの如き目的は、誠に、單純である。併し乍ら、斯かる目的が單純であるのは、實は、其の達成の道が單純であると云ふ意味で

はなくて、長い哲學の歴史に於いて、繰りかへし主題となり、しかも、其の都度、斯かる主題の達成が中途に挫折して、再び、主題として生き還へり、斯くて、哲學にとつて常に現はれ来るもの、又、誰にも、一應は考慮されるものとして、單純な性格を有すること、成つたものであらう。

媒介の思想の眼目は、論理と歴史との統一、或ひは、論理と事實との統一に在る、と誓いた。併し乍ら、其のことは半面に又、論理と歴史との無媒介なる一致、或ひは、單なる同一性に於ける統一を、意味するものではない。斯かる同一性の見地は、本論のフツセルに關する考察が示す如く、半面に、必らず、内外並存、或ひは、時間・空間並存の思想を、潜めるものと考へられる。歴史と論理との統一、と云ふ主題が、常に、中途に挫折して繰り返へされると云ふ事態は、此れを裏から見れば、到達し得たと考へられる統一が、實は、同一性の見地を脱却せぬものであり、而して、斯かる假りの統一性が、直ちに、内外並存の足場を露呈して、再び、元の發足點に回歸することを意味するに他ならぬ。従つて、又、媒介の思想の眼目は、同一性の見地の、峻嚴なる批判を任務とする。

媒介の思想も亦、回歸の構造を有することは、例へば、研究の中の重要な概念である「表裏反轉」の作用、或ひは又、ヘーゲルの根源分割への考察、等に於いて、幾度も強調する如くである。併し乍ら、斯かる回歸の構造は、本論に於て、例へば「言葉の形式」に關する考察が、繰り返へし論ずる如く、單なる、出發點への轉落ではない。意味を喪失して、再び內的行爲の制約下に轉落した言葉は、單なる形骸に墮した言葉として、改めて、知覺の檢證を必要とするものである。其れに反して、意味の共同的統一性を完成して、もはや、言語的領域をば、媒介的に打ち超えた概念は、しかも、單に言語の制約を離脱したのではなくて、實は、言語の特殊を媒介的に打ち超えたものとして、言語

的アプリアリとしての「言葉の形式」を所有し、斯く「言葉」の性格を包含することに依つて、意識内部への手懸りを、保有する。而して、單なる形骸としての言葉が、再び、知覺作用からの檢證を要するのに對して、右に擧げる如き「言葉の形式」は、他ならぬ概念として、意識内部に、單なる知覺ではなくて、實は、斯かる知覺の、受容的多様性をば、統一的なる「表象の定位」に導く處の、直觀の作用を喚起するのである。

斯くの如きものが、本論の研究に於いて、重要な位置を占める「表象の定位・分極」の規定であり、同時に、斯くして、哲學の傳統的形式とは異つた、知覺と直觀と表象との規定、並びに、意識構造の新たなる規定が、試みられるのである。「意識の二重構造」とは、右の如き意味であり、直觀とは、單なる内在的作用ではなくて、言語の外的領域を闊しつゝ、再び、内に回歸し來つた意識活動に他ならぬ。それと同時に、單なる對象の受容として、内在化された知覺の多様の主觀性は、上の如き直觀の媒介に俟つて、其處に、媒介的統一性を得て定位・分極し、斯かる分極は又、其れを支へとして、意味的言語を表現する。而して、斯かる意味の領域の成立は、テオドル・リットやフツセルが、*Ideell*と云ふ規定を興へた如く、客觀的、對象の領域を形成するのである。即ち、直觀と知覺との、表現活動に依る媒介は、上の如き經過を経つゝ、内在的な知覺的表象をば、*Ideell*な、觀念の世界、或ひは對象の世界に昂めて、客觀化する。謂はば、對象の世界の客觀性が、再び、自己に回歸するものとも、考へられるであらう。斯くの如き客觀性の回歸こそ、主觀的とも考へられる表現作用が、反つて知覺と直觀との意識内活動を媒介して、實は、對象界そのものへ轉出する働きであつて、此れを裏から云へば、對象の世界が、主觀的な表現の領域に轉出し來り、しかも、斯くすることに依つて、一方には、表現の主觀性を打破し、他方には、單に主觀から見られた「對象」とし

ての、自己の主観性をも打破しつつ、其處に、統一的な意味の客觀的領域を、現成せしめることと、考へられるのである。斯かる領域こそ、媒介の立場が規定する「現象」の世界に、他ならぬ。斯くの如く、媒介の見地に於ける回歸の構造は、同一性の立場の、出發點への轉落とは別個に、反つて、出發點が追求せる目的への、到達に依つて果された回歸に他ならない。

右の如くして形成せられた、意味の客觀的領域は、自他の意識に表象を分極せしめ、而して、斯かる分極の緊張を足掛りとする言葉に於いて、自他は、相互承認的に、結合せしめられる。言葉が、人間の思想的紐帶であるとは、此の意味に於いてであらう。しかも、斯かる結合の形式は、フツセルの所謂傳達的表現作用の場合の如く、單に、話し手を、聞き手が、一個の人格として受けとる作用、即ち、外的知覺の形式ではない。それと同時に、斯かる結合の形式は又、フツセルの考へる如き、右の傳達的表現とは無媒介なる、孤立せる心的生活に於ける、表現作用でもない。何故ならば、表象の分極は、必ず人間の自他と云ふ、孤立せざる相互關係を、豫想するからである。さうではなくて、自他が、各々の内的行爲の媒介者、即ち、表裏反轉の作用によつて、客觀的に定立された意味的表現に於いて、單なる、我と汝との並存關係を打ち超えつつ、意味の統一性に於いて、新らたなる結合形式を、現出せしめるのである。言葉と云ふ形式に於いて、意識の外に、表現された意味の客觀性の内へ、我と汝とが、攝取せられつつ、其處に、新らたな結合形式が産出されるのであり、斯くの如き形式こそ、「意味の共同性」であり、又、「意味の種的性格」に他ならぬ。

従つて、意味の共同的統一性は、單なる我と汝との、並存關係を打ち超えたる、種的、歴史的媒介を必要とする。

我と汝との關係と云へば、必ず、我が汝といふ人格を、又、汝は我と云ふ人格を、フツセルの如く直觀的に *anschaulich* 受けとることが、必要である。従つて、斯くの如き關係に於いては、言語を異にする人間の相互も、或ひは又、同一言語に屬する人間の相互も、同様に、我と汝として並存することが出来る。何故ならば、たとひ、言語を異にする人間の相互と雖も、その關係は、決して、物理的交互關係や、或ひは又、群棲的交渉である筈はない。必ずや、相手を一個の人格として、人間的に把握するであらう。斯くて、人間の並存關係の、最初の、原始形態として、身振りによる表現、或ひは又、對象の指示が行はれるのである。

上の如き、人間の並存的結合形式の、一般的方法は、云ふ迄もなく、「表象の標示」に他ならぬ。身振りとは、自己の表象をば、身體によつて外に標示することであり、而して、斯かる標示作用の理解と、それへの應答は、必ず、斷續的であつて、一度それが終れば、我と汝とは再び元の並存關係に立ち戻つて、恒常的な媒介的結合を欠く。即ち、表象が、我と汝とに、媒介的に分極するのではなくて、無媒介に、我から汝へ、汝から我へと、外に標示されるのが、此の形式に他ならぬ。表象の外的標示ではなく、表象の内的分極こそ、自己を共同的に結合する基底であり、而して、斯かる分極は又、必然的に、其れを支へとする言葉が必要とする。此の如くして、言語活動こそ、實は、自己の並存を打ち超えつつ、自己を歴史的共同的統一の内に攝取する、恒常的媒介に他ならぬ。

上述する處から、意味の世界の成立に於ける、言語の必然的聯關が、見出されるのである。しかも、斯くの如き見地からする言語とは、殆ど、凡ての論理學者、並びに哲學者が、表現一般の中に、無差別に投げ入れる處の、表現作用と呼ばれる如きものでは無い。其れは、フムボルトの所謂、相異の側面から見られた言語、即ち、歴史的なる特殊

面から見られた言語に、他ならぬ。其れが、他の一般的な記號 *Zeichen* から區別されるのは、云ふ迄もない。従つて、フツセルが、意味表現の作用を、記號作用と峻別したのは、確かに正確な分類である。併し乍ら、フツセルが、更らに進んで、言葉 *Wort* をも、記號と同一に取扱ふのは、正確な規定ではない。言葉は、フムボルトが正しく規定した如く、決して、裸形に於いて現はれ得るものではない。如何なる言葉 *Wort* も、其れが言葉として、意識の外に、單なる言語表象とは別に、表現し出される以上、必ず、特定の言語 *Sprache* に屬する言葉として、文法的制約と無關係に、現はれる筈はない。斯くの如き、文法形式こそ、言語の特殊面から、個々の言葉を制約するものに、他ならぬ。従つて、言語表現から、言葉を除くするならば、其れは、言語の特殊面を抽象した、表現一般に墮すること、今更、論ずる迄もない。斯くの如くして、フツセルが、*Wort* を *Zeichen* と同一視する考へは、最初に、表現一般から、意味表現としての、言語を分つたにも拘らず、再び、言語の特殊面を、*Wort* の排除と共に、否定して、抽象化せる表現一般に轉落する通路となるものである。

Wort を排除した言語とは、上述の如く、言語の特殊面を否定せる言語一般に他ならず、斯かる見地に於いては、必然のこととして、我と汝との並存關係も、又、意味の共同的統一も、均しなみに把握すること、上述の如くである。意味の統一性を、種的共同性として把握するものは、必ず、言語に於ける「言葉の形式」を、正しく把へねばならぬ。フムボルトすら、言語を、専ら内的行爲の側面から把へて、「言語は、エルゴンではなくて、エネルゲイアである。」と規定した。併し、斯かる規定は、書き改められねばならぬ。言語は、エルゴンとエネルゲイアとの、媒介的統一に他ならぬ。而して、斯くの如く、言語のエルゴンの側面を、正確に把握することは、同時に、言語の文法形

式を、言葉の定立に於ける必然的制約として、把握することであり、同時に、言語の特殊面の、新らたなる認定を、意味する。而して、言語表現の、斯くの如き特殊性こそ、實に、歴史的なるものとして、言語を異にする人間の、相互並存關係、並びに表象の標示とは別に、表象の定位・分極による、意味の共同性を、成立せしめる基底に他ならぬ。

斯くの如くして、普遍的論理の前提たる、意味の領域の成立への、歴史性の攝取が、試みられねばならぬ。言語の特殊面なくしては、意味の共同的統一は成立せず、而して、意味の領域の成立なくしては、概念も亦、成立することが出来ぬ。何故ならば、意味は、本論の最後の章が論述する如く、概念の包攝作用なくしては、單なる、表現の多様性に、墮するからである。それと同時に、意味的統一の、媒介を缺く概念も亦、單なる、言語表現の多様に、墮するからである。斯くの如くして、概念の成立は、必然的に、言語の媒介を基底とし、概念の成立は、フツセルの如き、言葉の形式を除去せる表現、或ひは、フムボルトの如き、單なるエネルギーとしての言語表現ではなくて、特殊面に於ける、歴史的言語の、哲學的解明を前提とする。

斯くて、研究の第一歩は、言語の媒介作用に向けられねばならぬ。

一言、此處に、翻譯の問題を、附け加へるのが、至當であらうと思ふ。何故ならば、上述せる如く、單なる表象の標示ではなくて、表象の定位・分極を基底とする、言語活動が、實は、人間の恒常的媒介者として、意味の統一作用を形づくるものであつた。従つて、翻譯も亦、一種の言語活動であり、しかも、其れが、異つた二つの言語を繋ぶものである以上、斯くの如き、言語活動に依つて、成立し來るものは、言語の特殊面を打ち超えたる、普遍的精神に、

關はるものではあるまいか。併し乍ら、フ、ポルトが、アガナムノンの翻譯に序とした、緒言にも在る如く、翻譯の嚴密を、忠實に追求すればする程、反つて、われわれは、二つの言語の相異面に、直面せざるを得ぬ。しかも、斯くの如き、二言語の相異面が、消滅する方向に、翻譯の有つべき目的が、あるのでは無い。翻譯の中に、何か異種なもの Friend を感ずるのは、翻譯の上手、下手に依るのではなくて、實は、斯くの如き異種の感じこそ、翻譯に固有の性質なのである。翻譯の動機が、概ね、原典への愛情と尊敬とに、在る如く、實は、翻譯が、原典と其の言語とを、讀む者に、確と感得せしめるにつれて、翻譯の目的は、益々高く達成せられた、と云ひ得るであらう。従つて、異種の感じが、全く喪失されるならば、其れは、反つて、原典を喪失した、恣意の表現と云はざるを得まい。

斯くて、翻譯の最高の目的は、反つて、上の如き異種の感じにあるとは、フムポルト自身の説く處である。翻譯は、二つの言語を繋ぐとは云へ、必ず、一方の、特定の言語にのみ、實現するものであるから、言語表現が意識に與へる作用は、決して、言語を異にする、人間の相互に、表象の分極を與へない。言語を異にする自他は、同一の對象を、指示することは出來ても、其のやうな指示による對象の知覺は、同一の言語からする、直觀の媒介を缺くものとして、單なる、表現の多様は成立しても、意味の共同性は、成立せず、従つて、譯語から眞の概念は形成されぬ。斯くの如くして、翻譯は、單に對象を指示する言語であり、言語表現の、意味的媒介を缺くものとして、宛かも、我と汝との、言語的媒介なき交流が、表象の標示にある如く、「表象的言語」と呼ばれざるを得ない。眞の普遍性の領域は、翻譯の如き、言語と言語との關連性に、見出されるのではなくて、第一には、其の言語に固有の、眞の歴史的特殊性に立ち還へることであり、而して、而かる特殊性に依る、眞の意味的統一の完成であり、第二には、上の如き、

聯關性「から」の回歸に依る、言語の自己内深化を経つつ、其れを打ち超えたる、眞の概念の成立による普遍性の確立に於いて發見されるのである。普通の統一は、フムボルトが言語の聯關性 *Zusammenhang* を、基礎にして定立した、象徴にあるのではなくて、常に、特殊面の深化による、自己内超出を経たる、媒介的統一でなければならぬ。

以上の如き見地から、われわれの、概念の研究は、先づ言語そのものの、哲學的解明にあること、上述の如くである。斯くの如くして、研究の第一章は、先づ言語の媒介作用の考察を以つて始められる。

一 言語の媒介と概念の媒介

概念は、言語の形態を缺いては、成立することが出来ぬ。言語は、¹⁾概念の地盤をなす。しかも、概念の地盤たる言語は、地盤として、自己の上に概念を形成せしめるにも拘らず、逆に又、概念は、其の有する媒介の働きに依つて、²⁾反つて、言語そのものをば、一層高次の存在たらしめる。即ち、概念は學問の地盤をなすものであり、³⁾學問こそは、フムボルトの言葉の如く、言語に、一層高次の嚴肅なる性格 *ein Charakter höheren Ernstes* を、⁴⁾賦與するもの他ならぬ。其の意味で、言語は概念の下位に在ると共に、上位に在るとも云へるであらう。

註(1) 此處に「言語」と呼ばれてゐるものは、後に嚴密な形で *Sprache* と *Wort* との區分を與へられて現はれるものとは別に、¹⁾一般的な用語に過ぎない。

(2) 「媒介」の概念も後の論述に其の嚴密な規定を讀むほかない。

(3) ヘーゲル「精神現象學」の目次の冒頭にある命題から。

(4) *Wilhelm von Humboldt: Gesammelte Schriften, Bd. 7. Einleitung zum Kawiwerk. S. 199.*

言語は、生の體驗の直接なる自己解釋として、生自體の領域からは解放されてゐるけれども、しかも單なる自我の體驗の直接的表現と見られる限り、論理の領域を形づくる概念の低位にあるものと呼ぶことが出來よう。併し乍ら、言語を、一方に於いては其の含む對象性から洗ひ去つて、表現の機能の極限に追ひつめることに據つて象徴化し、或ひは又、此の象徴をば各々の言語が表現する民族精神に擴大して、其處に民族精神の理想化の極限たる象徴を措定せんと試みるならば、此のやうな言語は、言語たることをさへ離脱せんとする象徴精神とも呼ばるべく、従つて論理の領域に對應する概念の、上位にあるものと云ふも不當ではあるまい。此の意味に於いても、言語は概念の低位にあるとともに又其の上位にある。

註(1) 田邊元先生「ヘーゲル哲學と辯證法」七、辯證法の論理、三〇〇、三〇四、三〇五頁その他。

概念を固有の領域とする論理と學問とが、言語の地盤を缺いては成立し能はぬとともに、象徴の立場も、言語を對象化して其の論理的分析の極限に成立すると云ふ意味に於いて、又言語の地盤を必要とするは云ふ迄もない。共に概念と論理との領域は、地盤としての言語に出發して其れに一層高次の性格を賦與しつつ、再び言語の領域に回歸する。此の、下位から上位に循環する圓環的軌道を媒介と呼ぶならば、概念は言語を地盤とする媒介の領域を占めるものと名附けることが出來るであらう。概念は言語の媒介作用である。

われわれは此處にフムボルトの特色ある見解を想ひ起さざるを得ぬ。フムボルトに依れば、われわれが概念の媒介作用にとつて地盤をなすと考へた言語か、既に一つの循環と回歸との圓環的軌道を有する媒介者なのである。即ち、言語は精神の努力が昏を通して外部に出でて、其處に現實的客觀性 *wirkliche Objektivität* を與へられた存在と成

るものであり、しかも其れに依つて毫も主観性を失ふことなく、反つて再び主観との結合に立戻るといふのである。「言語に攝取せられた思想は、精神 *Geist* に對しては對象 *Objekt* となり、その限りに於いて精神に向つて外からの作用を及ぼす。併し乍ら、われわれの見る處では、對象は主観から形成されて始めて對象となるのであり、しかも此のやうな作用は、始めに出で來つた主観の上に再び回歸する。」¹⁾ 此のやうにフムボルトは、既に言語を媒介の形式に於いて把えてゐる。それならば、先に述べた言語を地盤とする概念の媒介作用と、此處にフムボルトの説く如き言語そのものの有する媒介作用とは、如何なる關係をもつものであらうか。

われわれは此處にフムボルトと共に、視野を言語一般の領域から移して、言語 *Sprache* と言葉 *Wort*²⁾ との相關する動的領域を考察しなければならぬ。言語と、概念と言葉との三者の、嚴密な論理學的規定が必要となつて來たからである。

註(1) Humboldt, ebendans, S. 63.

(2) 言語と「言葉」といふ用語は餘り適切とは思へぬ。併し「單語」といふ用語は單なる語彙を現はすものとして一層適はしくないやうに思はれる。辭あるひは詞といふ用語のうち、前者は可成り適當と考へられたのであるが、不滿のまま、一應言葉といふ用語に従つた。

二 言語の媒介に就いて

特にフムボルトの *Innere Sprachform* の考へに關聯して

フムボルトは其の言語研究に於いて、言葉の形式 *Wortform* をば、單に音聲による概念の記號 *Die Bezeichnung*

tes Begriffs durch den Laut に他ならぬと規定してゐる。此の場合、概念は人間の精神を意味すべく、言葉の形式は單なる人間の容貌を意味するに過ぎぬ。人間の精神が、單なる自己の容貌以上の何ものかを志す如く、「概念は言葉から解き放たれようと試みるのであるが、人間がその容貌をかなぐり棄てることが出来ぬやうに」、言葉は何らかの形式をとつて概念にまつはる。此のやうに、言葉は概念に對して不可分の關係に立つ。にも拘らず、精神は絶えず言語の領域 *Gebiete der Sprache* から獨立しようと試みねばならぬ。何故ならば、精神は言葉をして何よりも先づ人間精神の内的行爲 *innere Thätigkeit* を持続せしめる支點 *Anhaltspunkt* たらしめねばならず、單なる記號の枯死せる形骸に墮しめてはならぬからである。しかも、絶えず持続せんとする内的行爲に對して、言葉は記號化して、其れを阻む一個の制限 *eine Schranke* たらんとする傾向を有する。と同時に、記號化した言葉は、一方には單なる質料としての音聲と化し、又他方に於いては形式的な意味の一般性に墮し、かかる自己分裂によつて精神の生ける内的統一を枯死せしめようとする。従つて、此のやうな言葉の記號化を防ぎ、おのが内的行爲を維持するための闘ひが、絶えず精神に課せられるに到るのである。斯くの如く、人間精神は絶えず言葉の形式を離脱せんと試みる。

併し乍ら、言葉の有すべき性格が固、人間精神の内的行爲を持続せしめる處にあるならば、此の性格は、一方的に言葉の形式を離脱せんとする努力のみに依つて、果して達し得られるものであらうか。否、寧ろ此のやうな性格は、反つて再び人間精神を言葉に回歸せしめる要請となるものではあるまいか。何となれば、人間精神の内的行爲を絶えざる持続のうち止めようとする努力が、單に言葉から離脱せんとする一方向を指すのみに了つては、反つて流動の直線化とも云はるべく、刻々の絶えざる持続 *immer mehr enthaltende* を將來することは容れまい。其の爲めに

は、言葉から離脱せんとする努力と、その努力を更に振ひたしむる抵抗 *Strebun und Gegenstrebun* との、二方向の媒介が必要となる。此の抵抗は云ふ迄もなく、逆の方向から、即ち言葉への定着と沈澱との側面から觸發されて、始めて將來するものであらう。斯かる努力と抵抗とを媒介するものとして、言葉は自己の形式を獲得するのである。従つて、われわれはフボルトの説く處を出でて、言葉の記號化と言葉の形式とを厳密に區別しなければならぬ。言葉の記號化は、人間精神の内的行爲を何等内的關聯なしに言葉と結合 *Verbinlung* せしめ、それに依つて内的持續を枯涸せしめるでもあらうが、言葉の形式は、努力と抵抗とを媒介 *Vermitteln* して絶えざる内的持續を可能ならしめるものである。言葉の眞の形式は、人間精神の内的行爲を媒介して、其れを極限として外に措定することに他ならぬ。總じて媒介とは斯くの如く内外の統一であり、その形式は、内部が極限として外に措定せられ、逆に外部が極限化されて内に定位することを意味する。今の場合に當てはめて云へば、人間の内的行爲を媒介して外に極限化したものが言葉であり、人間の外的行爲を内に極限化して媒介したものが、表象に他ならない。

従つて、人間の内的行爲を絶えざる持續に止めんとする言葉本來の性格は、記號化せる言葉から離脱しつつ、反つて再び言葉の眞の形式に回歸する。此れが内的行爲の媒介と呼ばれる言葉の働きであり、われわれは此れに依つて言葉を人間精神の内的行爲の媒介者と規定することが出来る。フムボルトが、言葉の記號化を防ぐための精神の努力は、再び言葉に向けて歸來する *fight sie wieder dem Wort hinzu* と述べざるを得なかつたのは、まさに此の狀況を物語るものと云へよう。

註(1) フムボルトが言葉 *Wort* と言語 *Sprache* とを何等厳密に規定せずに論を進めてゐる一例。

- (2) 表象に關して此處には不徹底な論述を残すに留める。意識とか表象とかに就いて後に論ずべき場所がある筈だからである。
- (3) 此の項に於けるフムボルトの引用は、殆ど前掲書一〇〇頁から。云ふ迄もなく此れはフムボルトの解釋ではない。

われわれは、フムボルトが豫想し乍らも、未だ適確には表現するに到らなかつた言語の媒介作用を、其の學說から出でて、改めて規定し直さねばならぬ。其のためには、先づ言葉の形式を言葉の記號化の傾向から嚴密に區分して、前者に對しては當然興へらるべき眞の規定を興へなければならぬ。既に見て來た如く、言葉は精神の内的持續を逆の方向から努力し還へして、其れを眞の持續たらしめる重要なモメントであつた。此のやうな内的行爲の媒介者たる言葉は、内部の極限として外に言葉の形式を措定する。其れが極限であると云ふ意味は、此のやうにして形成された言葉が、文法の妥當する言語の領域を構成し、更に此の言語の領域を地盤として、一方には論理の世界が、他方には廣義の文學の世界が築き上げられ、其れらが單なる文法的妥當を超えて、各々独自の方法に於いてではあるが、均しく人間精神の内的行爲に立ち歸つて、生との新たななる聯關を充すからである。われわれが此の研究に於いて對象としてゐる論理が、冒頭に於いても述べた如く、言語そのものを地盤として形成されるにも拘らず、反つて現實と生とを、言語の領域を超えて切實なる對象とするに到るのは、言語を構成してゐる個々の言葉が、極限の形に於いてではあれ、既に人間の内的行爲を通して現實と生とに連るからに他ならぬ。フムボルトに倣つて、精神の内的行爲に對して言語活動 Sprachverhalten を外的なるものと考へるならば、内部を媒介して措定された言葉は、直ちに以つて、言語活動といふ外的行爲そのものの媒介者に他ならぬ。言葉が極限であるとは此の意味であり、斯くて言葉は實に人間精神の内外を統一する媒介者と呼ばれるのである。

フムボルトは、言語研究といふ特定の領域に制約されて、其の水準を出でて眞に思惟の領域にまで、言語の媒介作用といふ問題を推し進めることが出来なかつた。従つて、其の扱へた媒介の働きも、内外を統一する眞の媒介作用に到達する能はず、所謂その「内的」言語形式 *Innere Sprachform* の側面に捉はれて、不十分たることを免れなかつたと云はざるを得ぬ。若しも此の點に考へ及ぶならば、其の説く内的言語形式の規定は、更に深く且つ明るく秘奥を顯はして、あれ程に鋭い示唆を有しながら、しかも其れに劣らず従來の研究者をなやました曖昧と混濁とを洗ひ去つて、多産なる推論の前提となすことが出来たであらう。フムボルトの言語研究に於ける *Spracherzeugung* と *Wort-erzeugung* との間の不明瞭な關係、同く *Begriff* と *Sprache* 用語の混亂、特に *Form* と *Sprache* 概念の亂雜な使用、*Verbindung* と *Vermittlung* との間の漠たる類推、更には *Laut*, *Ton*, *phonetische*, *Lautform*, *Articulation* 等、一聯の概念の稍、手當りまかせな使用など、數へ上げれば、其の學說の脊柱には、根源的なるものの間近に接近し乍ら、猶ほ、其れを確とは把握せぬもどかしさが潜んでゐて、讀む者を、牽くと共に退け、その思想と共に文章をも、一種の冗長に導いてゐる。フムボルトの概念規定は、常に、必要の側面のみを手懸りとして進み、充分の側の條件を考慮しない。其の捉へた、言葉の媒介作用が不充分であるのに似て、其の使用する言葉が又、不十分な媒介を基礎にして、推論の前提をなしてゐるのは、單なる偶然と云へるであらうか。言語を直接の研究對象とせぬ此の考察に於いては、それらの一々を仔細に検討する譯にゆかぬ。併し乍ら、フムボルトの學說にとつて、重要な位置を占める、其の内的言語形式の思想は、此れを簡潔に吟味して、其處から言語と言葉、内的文法と外的文法との相關を導き出して、言語の媒介作用をば、更らに、明かにしなければならぬ。

註(1) 文法形式と言葉との、相互媒介に關しては、意味の構造の考察に於いて、改めて、論ずる。

(2) 例へばフムボルトの前掲書、九八頁、並びに其の脚註を見よ。フムボルトは言語活動ないし言語構造といふ概念に依つて、言語を地盤として構成される三つの領域を描摘してゐるが、それも甚だ嚴密を缺いた曖昧な規定なるを免れぬ。

(3) 此の問題は後に一層嚴密に觸れる。

三 内的文法と外的文法

同じくフムボルトの Innere Sprachform に關説して

内的言語形式 Innere Sprachform とは、フムボルトに據れば、言語が自己の目的を達成するために採る二つの技術 Technik のうち、一方の音韻的部分 Phonetischer Theil に對して、特に知的部分 intellektueller Theil に關するものであり、而して此の知的部分、言語の音聲形式 Lautformen が生ける分節作用 Artikulation と結合して形成されるものである。従つて分節の働きは、言語の記號的傾向よりは寧ろ其の内的行爲の側面に關はりをもつべく、其處から又、分節作用が知的部分として言語の形態よりは意味に關はりをもつべき性質を豫想せしめられる。フムボルトによれば「此の全く内的な且つ純粹に知的な部分こそ、まさに言語の本質を形づくるものであり」、同時に又、言語に於ける特に此の側面の性格こそ、人類の全體をば、其の精神活動に於ける目的と手段との一致によつて同一ならしめるものに他ならぬ。従つて、言語に於ける知的部分、それぞれの國語の働きに依つて其れらの國民をば、人類全體の同一的地盤に立たしめるものであると云ふ。しかも猶フムボルトは、言語の知的部分が其れと同時に、諸種の原因によつて、凡ゆる言語に對して各々の國民の有すべき個別的性格 individueller Charakter der Nationen に於ける言語の媒介

Einem を賦與するものであるとも云ふ。⁽¹⁾ して見れば、言語の知的部分に相應する内的言語形式は、一方に於いては、人類の精神活動に於ける目的の普遍性を招來し、又他方に於いて、各民族の精神的體制 (Geistes-Organisation der Völker) とも名附くべき個別性を可能ならしむるもの、換言すれば言語 Sprache そのものの全活動に於ける媒介者と呼ぶことが出来るであらう。

註(1) 斯くの如く「音」韻的部分は、内的言語形式に相應する知的部分から最初は區別されてゐたにも拘らず、其れに聯關する「音」聲形式が分節作用によつて今度は知的部分に轉化して來る。最初は言語の本質から選けられた「音」の側面が、改めて言語の本質をなす分節としての「音」となつて轉化して來ると云ふ表裏反轉の現象は、われわれが今其の確立を志してゐる「媒介」の働きに於いては、寧ろ一般的方式とさへ呼び得るものであるが、其の點を方法としては自覺せぬフムボルトの立場に於いては、先きに擧げた條件を後に貶しめるといふやうな論理的規定の混亂を惹き起す原因と化してゐる。フムボルトの思想が理解し難い點は、おもに此のやうな處にその萌しを有つと云へるであらう。

- (2) フムボルト、前掲書、八六頁。尙、この項に於ける引用は主として八四、八六、八七頁から。
- (3) 國語と各々の國民とが、其の據る領域を同一にするか否かは暫く問はず、此處では寧ろ論述を理解し易からしめるために「國語」といふ用語を採用した。
- (4) フムボルト、前掲書、八七頁。

上述せる處に於いて、フムボルトが其の内的言語形式に關聯して提出した精神的體制 (Geistes-Organisation) 或ひは根源的體制 (der ursprüngliche Organismus) の思想は、特に言語の各民族に於ける相異 (die Verschiedenheit der Sprachen) の側面を強調して、此のやうな民族の特殊を地盤とする言語 (Sprache) のみが、人間精神の世界的普遍性を招來し得るものと、主張するかに見える。併し乍ら、フムボルトは其れに依つて、一つの言語を構成する個々の言

葉 Wort の側面を除外したのではなくて、幾分不明瞭ながら、寧ろ此の側面に言語の普遍的性格を基づかしてゐるとも解することが出来るであらう。各民族に相應する言語の、無限の相異にも拘らず、何ものか人間精神の全般に通ずる或るものが存在して、其れが言葉のなかに記號化されて……*den Worten, als Zeichen, ……* 顯現してくるとは、フムボルト自らの説く處である。此處に人間精神の全般に通ずる或るものと呼んだのは、他ならぬ、人間精神が單なる言語の領域に停まるのではなくて、其れを超え、其の目的を實現して既に言語形態を脱ぎ棄てて、事物との交渉に入るや、斯くの如き人間精神そのものの活動に對して始めて顯現し來たるもの、即ち現象であり、斯かる現象の共通者とも名付くべきもの *etwas Gemeinsames der Erscheinung*。其れを指してゐるのである。

即ち、フムボルトに依れば、人間精神そのものの活動こそは、特殊的相異の側に置かれた各々の言語が、其處を目的とし、其れを理想として、その實現のために努力すべき目標に他ならぬ。しかも、フムボルトの所謂言語目的 *Sprachzweck* とは、各々の言語が單に靜的な形態の側から見られたものではなくて、動的な活動の側面から把握せられたものであり、従つて、各々の言語が實現すべき目的は、實は自己目的 *Zweck in sich* として言語そのものの領域に即して顯現するのである。換言すれば、其れは、特殊なる各々の言語のうちに現成し來つた世界的普遍性であり、同時に、人間精神の活動そのものに他ならぬ。人間精神は、斯くの如き形式に於いて、始めて言語の特殊なる領域を打ち超えつつ、事物そのものとの交渉に入り、斯かる人間精神と事物そのものとの交はる處に、現象と呼ばれる世界が成立するのである。

フムボルトが、現象のうちの或る共通者と呼んだものは、上述の如き意味に於ける現象 *Erscheinung* のうちの或

る共通者と考ふべく、従つて、斯くの如き道程に於いて實現された言語目的をば、彼が、「全く内的にも非ず同時に又外的にも非ず理想的なる世界の創造に於いて、主體性が客體性と結合する普遍的な言語目的」と呼んだのも、まことに至當のことと思はれるのである。

註(1) W. v. Humboldt: Gesammelte Schriften. Bd. 4. § 1. Über das vergleichende Sprachstudium in Beziehung auf die verschiedenen Epochen der Sprachentwicklung. S. 31.

(2) ebendas., §. 8. Über den Nationalcharakter der Sprachen. S. 432.

(3) 同上。尙、此處フムホルトの使用する *das Gemeinsame* は、*das Allgemeine, das Gemeinsame, das Einzelne* の混交した規定を含み、彼一流の曖昧な用語の例であるが、私見は此の場合、*das Einzelne* の中に實現されるものとの *Allgemeinheit* の意味を窺見してゐる。

(4) フムホルト、全集七卷、一一五頁

(5) 全集、四卷、前掲章、四三〇頁

(6) 註(4)と同じ。……den allgemeinen, Subjectivität mit Objectivität in der Schöpfung einer idealen, aber weder ganz innerlichen noch ganz äusserlichen Welt verbindend; Sprachzweck.

事實フムホルトの云ふ如く、「言語 Sprache は決して對象を措定するものではなく、精神に基く言語産出といふ形に於いて、對象に關する概念を自發的に措定するものである。」⁽¹⁾ われわれは、此の數行のなかにカントの先驗論哲學 Transzendental-Philosophie の「言語哲學にたゞする見事な適用を示されるのであるが、⁽²⁾ その點に就つては他の機會に譲らねばならぬ。其れはそれとして、フムホルトが此處で、宛かもカントの先天的 *a priori* と呼ばれる思想

の構造を想起せしめるが如き方法に於いて、概念 *Begriffe* の定義を興へてゐる點を注意せねばならぬ。即ちフムボルトは、對象に關するものとしての概念に對して、精神が自發的 *selbstthätig* に其の言語産出 *Spracherzeugung* を通じて、一つの言語的アプリオリを興へると考へてゐるのである。上に引いたフムボルトの言葉は、概念は對象を豫想するものではあるけれども、しかも其れが言語の側から見られる限り、未だ對象そのものを指定するのではなくて、寧ろ言語産出に依る言語的アプリオリと考へらるべきであるとの主張であらう。して見れば、對象そのものに關係すべき概念に對して、未だ其れ固有の活動を興へしめず、反つて其れを言語的アプリオリとして、言語の領域にひき止めるものは何であらうか。

他でもない。其れは概念に残留してゐる言葉 *Wort* の形式を指す。概念が其れを離脱しようとして、遂に棄て得なかつた言葉の形式こそ、²⁾ 實に、概念に殘された言語的アプリオリに他ならぬ。フムボルト自身は、此の言語哲學にとつて最も根柢をなす言語と言葉と概念との媒介關係をば、常に曖昧な考察のなかに捨て去つてゐる。にも拘らず、其の言語研究のなかで何か對象に關する問題を取扱ふ場合には、屢、特に言葉 *Wort* といふ用語に従つてゐる點を忘れてはならぬ。一面、フムボルトの言葉と概念との嚴密ならざる混用を示すものではあるが、又此處から、フムボルト自身、漠然とながら對象に關するものとしての言葉の形式が、言語的アプリオリとして、一方には對象そのものを言語の領域に持ち來す通路となり、他方には、言語活動が對象に滲透するための通路となることを、豫想してゐたものと考へ得るであらう。而して、此の意味からすれば、概念に残留する言葉の形式は、既に言語そのものの領域を超えて概念が對象そのものを指定する場合に、其の足掛りとなるべく、對象を記號化して内に受持するものと云はね

はなるまゝ。

事實フムボルト「概念の記號 Die Bezeichnung der Begriffe...は音聲形式に於いて言葉の形式(或ひは言葉の構造) Wortbildungを形成するものであり、此の言葉の形式から概念(形式) Begriffsbildungが發生する。」と論じてゐる。従つて、言葉の形式は對象に通路を拓いて、概念を發生せしむべき足掛りに他ならぬ。更にフムボルトを引用すれば、「各々の概念は、内的には、分節感能の見出したる音聲の記號化に依つて、自己自身に相應した標識 Merkmalen又は關係を現はして、言葉の形式といふ他のものの上に維持されねばならぬ。此のことは、外的な、物的な、従つて感覺を通して知覺される對象にもあてはまる。しかも此の場合には、言葉 Das Wortが單なる對象の感覺に於ける代置者ではなくて、言語産出に依つて作られた、特定の言葉の發見による對象の把握を意味する。」

註(1) フムボルト、全集七卷、九〇頁

(2) 泉井久之助氏著「フムボルト」(西哲叢書) 言語研究の章参照。尙、フムボルトの言語研究に關する勞作を讀むにあつて、此の書が正確な手引きを與へた點を、附記して感謝したい。

(3) 拙論、第二節、言語の媒介に就いて

(4)(5) フムボルト前掲書、八九頁

上述する處から、われわれは、言語そのものは對象を措定することが出來ないけれども、しかも其れは個々の言葉を産出することに依つて、對象そのものに關すべき概念を發生せしめ、此處に、對象措定への通路を見出すと歸結することが出来る。従つて、言葉 Wortは此れを對象との關聯に於ける側面から見ならば、その對象を措定すべき概念の足掛りとして、謂はば對象に關する概念の記號 Bezeichnung der Begriffeに他ならず、しかも、此れを言語

活動といふ精神の側面から見れば、言語的アプリオリとして、言語産出によつて形成せられた言葉の形式 *Wortbildung* を意味するものであらう¹⁾。事實、個々の言葉は言語の相異の點から規定された精神的體制としての言語からは、豫め文法的に制約される。如何なる言葉も、その屬する言語に固有の文法に依つて、文章或ひは説話のなかに於いて其れの占むべき位置と方向とを、豫め與へられざるものはない。活動に於ける言葉は、單なる語根としてではなくて、同時に、文法的規制によつて一定の位置と方向とを與へられたものとして、斯くて始めて全體としての言語に於ける構成要素たり得るであらう。

「語根が、脈絡ある説話のなかに於いて裸の形態 *nackte Gestalt* のまま現はれると事ふことは、一二の言語を除いては、全く稀なことである。」²⁾とは、フムボルトも説く處である。個々の言葉は、單なる裸形に於いてではなくて、其の屬する言語に固有なる文法形式 *grammatische Form* に依つて規制せられ、其處に始めて生ける言語として、其の屬する言語の全體的關聯のうちにも所を得るのである。従つて、文法形式とは、個々の言葉を其の屬する言語の全體に於いて、活動に入らしめるための通路であるとして規定し得るであらう。此のやうに、文法形式は個々の言葉と言語の全體とを媒介する通路をなす。而して、文法形式は言語の全體の側からの規制としては、概念の足掛りをなす言葉の形式にたいして、缺くべからざる言語的アプリオリを興へ、この方法に依つて、概念の活動をば必然的に特殊なる各々の言語の地盤に結び付ける。云ひ換へれば、概念が言語的アプリオリを必然とする限りに於いて、必然的に各々の特殊なる言語との關聯をも必要とする。即ち、特殊なる國民性の上に立つ各々の言語の地盤を缺いては、普遍的なる人間精神の活動たる概念の領域も亦、成立することが不可能となるのである。

上述の如く、個々の言葉は、概念をして對象そのものを指定せしめるための言語的アプリオリであり、又言語的通路でもあつた。而して、言葉が對象への通路を拓く方法は、其れが人間精神の内的行爲を媒介するといふ形式に依ることも、既にわれわれの論じた處である。扱て、人間精神の内的行爲とは、此れを對象との關聯に於いて見るならば、實は對象が意識の事實として攝り入れられるための、内的活動形式に他なるまい。即ち、われわれの意識に攝り入れらるべき對象は、表象として意識の事實となる場合に、豫め、意識の有機的全的から規制をうけざるを得ぬ。此の、意識の全體からの、個々の表象に對する規制が、他ならぬ内的行爲なのである。従つて、概念の足掛りたる個々の言葉を、言語の全體的活動に結び付けるものが文法と呼ばれるのに對して、其れが意識内に於ける對象の足掛りとも名づくべき個々の表象を、意識の全體に結び付ける規制即ち内的行爲が、フムボルトに於いて内的文法 *innere Grammatik* とも呼ばれてゐるのは、まことに至當のことであらう。

此處に、フムボルトの内的文法に關する不明瞭なる思想を高めて、其れを明かにする規定がある。即ち、内的文法とは、對象が意識の事實として人間精神に攝り入れられる場合に、被らざるを得ぬ制約であり形式である。語根が文法形式の規制をうけて、言語として言語全體の方向に規定されると同様に、對象は内的行爲の規制をうけて、表象として意識の全體の方向に規定される。後者を内的文法と呼ぶならば、其れに對して前者を外的文法とも名付け得るであらうか。人間精神の全活動を、意識の内と言語の外とに一應區分するならば、此のやうな内外二つの領域に關する各々の文法を考へることも可能であらうと思ふ。而して、外的文法が言語の全體の側から個々の言葉を規制するのに對して個々の言葉は又、對象をば内的文法を通じて媒介することに依つて、言語そのものの表現する意味内容を規定

し反へず。内外二つの文法は、此のやうに言葉を通じて交渉し合ふと同時に、言葉の媒介を俟つて其の統一を動的に形成する。

言語そのものの領域を形づくる二つの部分、即ち一方に詩を極限とする文藝の世界、他方には論理を極限とする學問の世界、更に云ひ換へれば言語の領域を特色づける表現と思惟との兩つ^{がた}の世界が、單に各々の言語に固有なる文法の制約に止らず、其れを超えて、人間精神の普遍的領域を形成し得るといふのは、實は、各々の言語が言葉の媒介を通して、對象そのものに關はりを有つからに他ならぬ。外的文法は、個々の言葉等特殊なる言語の全體の側から規定するものであるが、個々の言葉は又、言語的アプリアリによつて對象を媒介せる個別者としての概念 *der Tusch* *das Wort individualistische Begriff* となり、或ひは又表現の詞として、言語全體の活動が目標とする人間精神の普遍的領域を形成するものであり、それに依つて逆に、言語そのものを規定し反へず働きを有つ。

われわれは、先きに、フムボルトが其の言語哲學の中核をなす内的言語形式を規定して、其れが各々の言語の特殊性とともに、人類全體の普遍的地盤を成立せしめると主張する點を考察の對象に擧げた。而して、われわれは又、斯かる人類の普遍的精神は、單なる特殊としての言語そのものの領域に止まることなく、更に個々の言葉の領域にわけ入つて、言語と言葉との動的關聯を考察することに依つてのみ可能とせられる點を、一面フムボルトに據りつつ、他面その學説を高めることによつて指摘した。此のやうな觀點の下に、われわれは、一方には概念をエレメントとする人間精神の普遍的活動が、言語的アプリアリを必然の制約とすることに於いて、言語の相異の側面を不可缺の條件とする點を規定した。と同時に、言語的アプリアリとしての言葉の形式は、概念を發生せしめることに依つて、言語の

領域を更に超えて對象そのものとの關聯を成立せしめ、其れに據つて、言語活動の目的たる意味内容を可能ならしめ、此處に言語の特殊の領域が必然に人間精神の普遍と結ばざるを得ぬ側面を規定した。所謂、言語の相異と言語活動の目標たる統一的普遍との關聯の問題、言葉を換へて云へば、言語の民族性と普遍性との關聯の問題が、⁶⁾此處に解き明かされたと云ふことが出来るであらう。

註(1) *Bezeichnung der Begriffe* といふフムボルトの屢々使用する用語は、注意して讀めば、多くは此の場合のやうに言葉の形式の意味に用ひられてゐる。

- (2) 全集七卷、七三頁
- (3) 同じく七五頁
- (4) 全集五卷、二六一頁。尙、此の規定はフムボルトを超えること以下に論ずる如くである。フムボルトは内的言語形式の概念が不明確であるにつれて、内的文法の内容をも不明確のままに捨て去つてゐる。
- (5) 全集七卷、一〇一頁
- (6) 例へば和辻哲郎教授「續日本精神史研究」、日本語と哲學の問題の章を見よ。

四 概念と言葉との關聯に就いて

意味の世界の成立

並びに、表現と論理との次元指定に就いて

特に、テオドル・リットに關説して

われわれは、言葉の形式が對象そのものの領域に關はる「概念」を發生せしめる點について上に論じて來た。しかも、言葉の形式は又、概念にたいする言語的アプリオリとして、必然的に特殊的精神體制としての各々の言語を豫想

せざるを得ぬ。實に、言葉の形式は、各々の特殊の言語をば、對象そのものと人間精神そのものとの交流する普遍的
 精神の領域に、媒介的に、結合せしめる通路に他ならぬ。而して、此の媒介的結合は又、單に言葉の形式の靜的把握
 に於いてではなくて、言葉の形式が、概念に轉化するといふ動的關係を通して、始めて可能となるものであつた。簡
 潔に云へば、言葉の形式から概念への轉化といふ働きは、言語の特殊としての領域と、論理の普通の領域とを、各々、
 獨自的に定立せしめつつ、しかも、斯かる分極を支へとして、媒介的統一を可能ならしめる作用に他ならぬ。フムボ
 ルトの如く、言語の活動をば、眞の個別化を將來すべき言葉の形式から概念への轉化として確認せず、専ら、言語の
 特殊と精神の普遍とを主題として考察する場合には、その豫想する普遍性も、單なる要請に止まつて、結局は、言語
 の共通性 *Gemeinsames* を以つて普遍に假るの他はあるまい。此處では、眞の個別に依る媒介を缺くからである。従
 つて、われわれは、言語活動に依る人間精神の媒介作用をば、論理の中核とも呼ぶべき推論式に當てはめて、次の如
 く規定しうるであらう。即ち、人間精神と事物そのものとの交流活動たる普通の立場は、言語の領域たる特殊を、言
 葉の形式に依る概念の個別性によつて媒介しつつ、其處に、始めて現成するものに他ならぬ。

扱て、言葉の形式が、フムボルトの所謂、概念の記號にあたり、而して、此の形式を足掛りとして、人間精神が對
 象への通路を見出すことは、既に論じた如くである。併し乍ら、斯くの如き、人間精神の事物そのものに關するべき
 領域は又、反つて、此の領域に通路を拓いた言葉の形式に依つて、一つの制約をうけざるを得ぬ。即ち言葉の形式
 は、言語的アプリアリとして、言語 *Sprache* の領域との關聯を棄て去つて考へることは出來まい。しかも、言語の
 世界とは、斷はる迄もなく、人間と人間との相互を結ぶ歴史的共同性の世界であり、各々の言語に屬する人間相互の

間に、言語の交流による精神上の結合を生ぜしめるであらう。此れが、例へばテオドル・リットの概念の共同性 *Einigkeit*、*Gemeinsamkeit*¹⁾ の意味する處であり、且つ、此處に招來された人間結合の性格は、推論式の特殊にあたる共同性である點からして、われわれは、其れをば、人間の自他了解 *Verstehen* と相互承認 *Anerkennen*²⁾ の立場と考へることが出来るであらう。此のやうに、言語の領域は固人間の相互承認をその性格とすべく、斯かる言語の特質は又、言語的アプリオリとしての言葉の形式を通して、常に概念の領域を制約するに到る。

即ち、第一に。言語の領域に招來される人間相互の結合關係の性格が、了解と承認といふ立場を意味するものである以上、其處に現はれる人間存在の構造は、例へばヘーゲルの對他存在 *Sein für anderes*³⁾ に他なるまい。人間そのものの眞の個性は兎も角も、斯く見られ、斯く映る、他者への存在としての人間が、此處では何よりも先づ主題となる。自己が何ごとかを語るといふ、しかも、其れは、我の自己ではなくて、反つて、他の自己が我に代つて何ごとかを語るとも考へられる。眞の人間の質存 *Existenz* も、主體性を具有する人間たる自己 *Selbst* も、此處では直接には顯現しない。併しながら、斯くの如き言語の領域を、否定的に媒介して、對象の措定と、人間精神そのものとの活動を導き出す概念の發生は、他ならぬ、言語の自己目的の活動たる、文法形式と言葉の形式との媒介作用であり、斯かる媒介を通じて概念の領域が形成せられるのであつた。従つて、上述の如き、言語の領域から概念の世界への媒介的移行は、當然のこととして、言語的なる了解の性格を有つ人間から、媒介的に、自己自身としての人間の世界を現はれ出でしめることとなるであらう。言葉の形式が、一方に於いて言語の制約をうけるものであり乍ら、しかも、言語的アプリオリとして、概念を豫想する以上、言語から言葉の形式への移り行きが、了解的人間から、自己存在とし

ての人間を豫想せしめるに到るのは、見易い道理であらう。

第二に。言語から言葉の形式への移り行きが、上述の如く、了解的人間から、自己存在としての人間の豫想を將來せしめるに對して、其れは又、對象の側面に關して云へば、單なる事物の表現と事物そのものとの兩者を、媒介し、措定せしめることとなるであらう。了解的人間と、自己存在としての人間とは、一面に於いて、慥かに各々の人間の型を示すものではあるけれども、此れを正確に云へば、寧しろ、人間存在の内部に於ける深化の問題、或ひは、内部の次元の問題であらうと思ふ。單なる、他者との了解關係に於ける人間を以つて、満足し了はることの出來ないと均しく、又、對他關係を全然無視する處に、眞の人間の生れ出よう筈もない。此の兩者が、互ひに抜き差し難く相抗ひ、又媒介し合つて、人間そのものの内部に、ゲーテのファウストに云ふ二つの靈 *Kraft, Stoffen* を形成して、汲み盡し難い人間精神の次元を現出するものであらう。此の事態は又、直ちに、對象の側面に於ける事物の表現と、事物そのものとの、兩つの次元の措定とも、結び合ふものであらう。上述する處から、われわれは、言語から言葉の形式への媒介的移行を以つて、人間と事物との兩側面に於ける、次元の措定と規定し得るであらう。

概念が、それ自身としては、普遍性を固有の領域とする論理の世界を形成するものであり乍ら、しかも、各々の言語といふ特殊性の地盤、即ち斯かるものとしての言語が有する表現の性格と、言葉の形式を通して切離ちがたく結び合はされてゐると云ふことから、上述せる如き、次元の措定といふ事態が発生したのである。従つて、概念にたいする言葉の形式からの制約は、言語的アプリアリとして、論理の世界にたいする了解の地盤からの制約ともなるのである。而して、斯くの如き制約に基づく、人間と事物との兩側面に於ける次元の措定は、他ならぬ、文法形式と言葉の

形式とが、相互媒介して、言語自身の自己目的の活動として、産出したものであつた。言語の内に二つの次元が單に並列的に存在すると云ふのではなくて、言語に於ける自己目的の活動として、従つて、言語が自己自身をも新らたな性格のものたらしめる媒介作用が、次元の指定の意味する處である。文法形式と言葉の形式とは、單なる、言語の内部の並列する部分ではなくて、前者は、言語の有つ共同性を概念に媒介し、後者は又、概念を發生せしむべき其の個別性を、前者の共同性に媒介するのである。斯くの如く、文法形式の側の特殊性に媒介されることに依つて言葉の形式が豫想せられ、言葉の形式は又、概念の個別性を豫想する。しかも逆に又、概念の個別性に媒介されることに依つて、特殊性の立場に在る各々の言語が、反つて自己を普通の領域に超克しつつ自己目的の活動を遂行するに到る。換言すれば、普通の領域が特殊なる言語へ、しかも特殊なる言語の自己目的の活動として現成し來ることを意味するのである。即ち、言語は、此のやうな媒介活動によつて、其れの有つ言語形式を保有しつつ、しかも、その特殊性を打ち超える普通の世界の、地盤を形成するのである。而して、斯くの如き普遍性の地盤こそ、所謂意味の世界に他ならないのである。

註(1) フムボルト、全集七卷、一〇〇頁

(2) Theodor Litt: Individuum und Gemeinschaft, dritte Auflage, S. 317.

(3) Hegel: Phänomenologie des Geistes, vgl. § Der Geist, C. c. Das Gewissen. Die schöne Seele, das Böse und seine Verzihung.

われわれは、上述せる如く、意味の世界の成立をば、文法形式と言葉の形式との交互媒介に依る、言語の自己媒介

作用、ないしは自己轉出の活動として規定した。而して、此のやうな言語の自己媒介作用は又、言語がその固有の地盤とする特殊性をば、論理の普遍の世界に轉出せしめるものとして、同時に、言語的アプリアリとしての言葉の形式が、概念に轉化するといふ媒介作用に、相當するものであらう。従つて、言語は自己媒介の作用に依つて、自己を意味の世界に轉出せしめつつ、其れを通して特殊なる各々の言語に於ける表現と論理の占むべき領域とを、媒介的に豫想せしめる。われわれは、先きに、言葉の形式から概念への轉化が、人間と事物との兩側面に、各々次元を設定する働きをなすことを指摘した。其れと均しく、右の轉化は又、言語活動そのものの内部にも、表現と論理といふ二つの次元を設定すること、此處に論ずる如くである。

言語の表現に依る意味の世界の成立が、人間の相互を、自他了解の共同性に於いて結合せしめて、其處に、觀念の獨立なる領域を形成するといふ點に就いては、例へば、先きにも擧げたテオドル・リットTh. Littの如きも、此れを指摘してゐる。即ち「個々の人々を意味的領域に導き入れると云はれる體驗が、共同的であるばかりでなく、其の可能性から云つて、意味的なもの自身の領域 *lies Reich des Sinnhaftion selbst* が又、共同的である。何故ならば、意味の内容は客觀化せられ、即ち、個人的體驗から解放せられるからであり、又、人間、場所、時間、ならびに狀況の具體的現實に關する結合から離れてゐるといふ意味で、觀念的 *Ideell* であり、斯くて、意味の内容は、單に人間の多數性のみならず、…其の觀念的共同性によつて、勤勞の共同、意味に關する研究の共力」などを促進するのである。われわれの見解に依れば、斯くの如き、意味の世界の客觀化、ないしは獨立的形成は、言語自身の自己轉出に依るものであり、しかも、かかる轉出の有つ媒介性によつて、同時に、論理の普遍性をも定立せしめるものであつた。しかる

に、ドイツの流れを汲みつつ、しかも、フッセルからカッシーラーに發展した象徴主義にも、多大の關心を有つものと想はれるリットは、意味の世界の成立が、同時に、論理の領域をも併せて定立するといふ媒介の働きを、見失つてゐる。従つて、われわれが論理の領域の一側面と考へる具體的現實をば、上述の如く、觀念の世界に置きかへて棄て去り、その結果、フッセルの場合の如く、意味のさまざまな層を、無媒介につみ重ねる傾向を、生ずるに到つてゐる。

即ち、言語に結び付く意味 sprachlich fixierter Sinn の體驗が擴大して、一方には、普遍なる言葉の意味 (die allgemeine Wortbedeutung) を形成し、他方には、普遍なる意味聯關 allgemeine Bedeutungsbeziehungen の總體關係 (das Gesamtgefüge) が形成される。而して、此の後者は、意味として内在化された事物的内容 (der sachliche Gehalt) を、單なる孤立と外的聯關とから、意味聯關の中に轉ずるものに他ならぬ。此のやうに、意味の世界は、客觀的に成立する。而して、斯かる意味の世界は又、リットに依れば、人間の多數性、又は個人の多數性、Vielfalt von Menschen, Vielheit der Individuen とつこの社會性 (Gesellschaft) の上に、閉ざる圍 (der geschlossene Kreis) とつこの總體精神 (Gesamtgeist) の體驗を形成せしめるものであり、其の意味から、社會的體制 (gesellschaftlicher Organismus) とも、或ひは社會的組み合せ (soziale Verschänkung) とも呼ばれて、其の構造はリット自身の規定する如く、集合的生活統一 (kollektive Lebensinheit) に他ならぬ。もともと、リットは生の哲學から採り入れた生活の概念を支へとして、人間の多數性としての社會を考へ、かかる社會的人間の精神的統一をば、フッセルの意味概念を足掛りとして、形成せんとするものの如くである。従つて、外的な生活の面に於ける人間の交互作用と内的な、

意味の交互關係とが、常に一種の類型をなすに過ぎぬ。即ち、個々人の多數としての「客觀的、外的世界と……意味の客觀化とを結ぶ類推 die Analogie が、此處で、われわれの問題となる。」とは、リット自身の説く處である。

上述の如きアナロギーは、リットが、作用的に結合してゐる *funktional verbunden ist* とか、或は、「生活と意味とを互ひに切り離すことは全然別である」とか、屢々辯護するにも拘らず、決して、眞に媒介し合ふことなく、従つて、其の結論する總體精神も、上に見て來た如く、單なる集合精神に他ならず、斯くて、リットに於ける *Gesellschaft* と *Gemeinschaft* との二つの概念は、何か本質的次元を形成するかに見え乍ら、實は、同一なる多數性と集合との同義異語に了る結果となつてゐる。斯くの如き見地に依つて構成されたリットの總體精神が、フッセルに於いては、其の基底 *Fundament* の考へに阻まれて、眞實には主張する處とならなかつた象徴主義に通じて、我と汝との相互交渉の象徴的定着 *symbolische Festlegung* に擬へられるのは、必然の成り行きであらう。ともあれ、リットの定立する意味の世界の、觀念的客觀性とは、我の話しかけと汝の話し反へし *Rele und Gegenrele* との交互關係として、超個人的 *transpersonale* に形成される象徴的形式に他ならない。従つて、斯くの如き客觀性は、單なる集合的總體に過ぎず、フムボルト的な言語の精神體制が指示する種の性格は、其處に見らるべくもなく、われわれが、リットの云ふ共同性を、上述に於ける如く種の性格に於いて捉へんとしたのは、實は媒介の立場からの解釋に他ならぬ。それと同時に、右の如きリットの共同性の考へに基づく意味の客觀性は又、決して、眞の普遍を形成する筈もなく、單なる集合に墮すること、以上に指摘せる如くである。

註(1)(3)(4)(5) テオドル・リット前掲書、三二二頁から三二四頁。§ IV. Die Sinnzusammenhänge, Erlebniszusammenhang und

Sinnordnung, Die Einigung im Sinn., Die Werksgemeinschaft der Kultur., Die Sozialität des Sinnerlebens.

(2) リットは、前掲書に於いてフツセルを援用してゐるが、後期のディルタイを通してのフツセルからの影響であらう。尙、フツセルの象徴主義に就いては、Heinrich Scholz; Geschichte der Logik. S. 46. S. 67. 参照のこと。

(6) 此のやうな社會概念の無媒介な規定と聯關して、意味の成立を、System der Sprachlichen Bedeutungen überhaupt と Besondere Sinngebilde との交互關係と考へるリットに於いては、意味の媒介的形成に必要な個別性のモメントが見失はれてをり、従つて又、眞の普遍の分野が拓かれる筈もない。

(7) リット、前掲書 vgl. § II. Ich und Du., Die symbolische Bewegung.

(8) 云ふ迄もなく、田邊元先生の、種の論理に據る。尙、意味に關する種の性格に就いては、後に、表象と意識と意味との關係を考察する項に於いて觸れる。

われわれは、上述の考察に於いて、言葉の形式から概念への轉化が、言語の自己媒介的活動として、言語自身を意味の世界に轉出せしめ、其處に、表現と論理との兩つたの次元が設定せられることを指摘して來た。斯かる媒介の働きに依つて形成され來つた論理の領域とは、又、人間精神と事物そのものとの關はる次元に、他ならなかつた。而して、われわれは又、此の新らたに形成せられた論理の領域、即ち、人間精神と事物そのものとの領域が、實は、其れらの兩者にとつて、中間者とも云はるべき言語活動を、成立せしめる根源であることを、忘れてはならぬ。言語は、人と人との中間者であると同時に、又人と事物との中間に立つ。即ち、言語は斯かる二重の中間者であり、しかも、斯くの如き二重の中間者としての言語の活動こそ、フムボルトの云ふ自己目的の活動として、その中間者としての働きを完了し、自己の特殊性を打ち超えつつ、反つて、自己の根源たる人間精神と、事物そのものとの領域に、媒介的

に、轉出しつつ反つて回歸するのである。斯の如き事態が、言語活動の眞の媒介作用に他ならぬ。即ち、意味の世界の成立に依つて、言葉は、言語的制約を打ち超えて概念に轉化し、概念は又、斯かる媒介作用を完了するや、論理の領域に關はるといふ其の性格に依つて、直ちに人間精神と事物そのものとの二つの根源に分割する。斯くの如きものが、ヘーゲルの根源分割 *Urteilen* の意味する處であらうと思ふ。而して、單なる表現の見地からして、並列的に、人間精神と事物そのものといふ名稱を以つて表現された二つの根源は、今や、主體と客體との歸屬關係に移されて、其處に、判斷の世界を形成せしめるのである。

併しながら、斯くの如き論理の領域の形成は、幾度も強調する如く、言語の特殊的地盤が、完全に媒介され了つて、始めて、可能となる。言葉の形式は、特殊的地盤の媒介を完了することに依つて、始めて言語的制約を洗ひ落して、概念に轉化し、概念は又、更に判斷と推理との階程に媒介を重ねて、フムボルトの所謂範疇 *Kategorie* の領域を切り拓くに到るであらう。併し乍ら、若しも上述の如き、特殊的地盤の媒介が不完全である場合には、言葉の形式は、直ちに言語的アプリオリの制約によつて引戻されて、再び、單なる言語的特殊的地盤に墮して、概念ではなくて、文法形式の制約の下にあるべき、言葉に轉落するであらう。フムボルトが、「具體的な言葉 *Wörter* から、謂ば其の根柢をなす直觀と感覺への上昇 *aufzusteigen* が行はれ、其れに依つて各々の言語 *Sprache* は、言語に魂を吹きこむ天才の力をかりつつ、言葉の形式に於いて *in ihren Wörtern*、音聲を概念に媒介する。理念的領域の、單なる記號にすぎぬ言語が、しかも、此のやうな言語から理念への同一化をなすのであるが、併し其れは又、反對に、概念から言葉 *Wörter* への轉落 *herabzustiegen* をも、將來せしめると考へられる。何故ならば、概念は單に、根源型式 *die Urbilder* として、言葉の記號をその類に従つて余す處なく、分類するに必要な働きを有することが、出来る

に過ぎぬからである」⁽²⁾と論じてゐるのも、以上の如き事態を豫想せしめるものであらう。

勿論、媒介の思想を確保するに到らぬフポルトの立場は、人間精神の普遍性を主題とする右の考察に於いて、言語をも、言葉をも、更には概念をも、漠然と一律に、人間精神の普遍性に對する無媒介なる個別 Individualisierendes と考へる傾向が窺はれる。民族の特殊性を基底とする民族精神に相應するものとしての言語にとつては、言葉は個別を、文法は特殊を、而して民族精神を現はす言語そのものは普遍の位置を占めるであらう。併し乍ら、斯くの如きものは、單なる表現の側面に於ける言語の分類に他ならぬ。従つて、表現の見地を去つて、其れとは次元を異にする人間精神の普遍性の見地をとるならば、右に擧げた三つの推論的分岐を包攝する言語そのものが、此處では特殊の位置を占め、斯かる特殊から、自己媒介的に轉出した概念が、個別の位置を與へられるであらう。若しも、言語活動を普遍性の見地に於いて考察せんとするならば、何よりも、上述の如き、表現と論理との次元措定を認めなくてはならぬ。フムボルトの述べる如く、概念が個々の言葉の側に特徴づけ stampet される場合には、其れは、もはや普遍者 etwas Allgemeines から轉落せるものも考へる可きであらう。併し乍ら、此のやうな、概念から言葉への轉落をば、フムボルトの如く、範疇と概念との間の關係と混同することは容されまい⁽³⁾。さうではなくつて、論理と表現との次元が、此の事態にあたるのであつて、言語的特殊の地盤を、眞に媒介し了へざる概念は、もはや、概念たる作用を失ひ、従つて、範疇への媒介的發展を言語的アプリオの側面から阻まれて、單なる言葉に墮し了るであらう。(未完)

註(1) Hegel: Phänomenologie des Geistes, verlag v. F. Meiner. S. 458. ... Die Sprache aber tritt nur als die Mitte selbständiger und anerkannter Selbstbewusstsein, ... 尙、人間精神の現象を主題とするヘーゲルの此の論致に於いて、われわれの云ふ事物そのものの側面が取扱はれてゐないのは、當然でもあり又注意すべき點でもある。

(2) (3) 註フムボルト、全集七卷、一〇一頁